



英獨兩國ニ於ケル戰時ノ穀物供給

上田, 貞次郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 19(4):555-576

(Issue Date)

1915-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052430>



經濟學
商業學

國民經濟雜誌

第十九卷

第四號

(大正四年
十月一日發行)

論

說

英獨兩國ニ於ケル戰時ノ穀物供給

東京高等商業學校教授

商學士 上田 貞次 郎

緒 論

或國ガ自產自給ノ農業國タル狀態ヲ脫ケテ世界經濟ノ大キナ分業組織ノ内ニ工業國トシテ立ツベキ時代ニ到達スルトキハ必ズ戰時ニ於ケル穀物供給ヲ如何スルカトイフ問題ヲ考ヘナケレバナラス。此場合ニ自由貿易論者ハ問題解決ノ鍵ヲ飽クマデモ世界經濟發展ノ趨勢ニ求メテ穀物ノ自由ナル輸入ヲ主張シ、一國ガ「世界ノ工場」the workshop of the worldトナルノ利益ナルコトヲ信ジテ居ルガ之ニ反シテ保護貿易論者ハ宜シク平生カラ農業關稅ヲ設ケテ内國ノ穀物生産力ヲ維持發

達セシメテ有事ノ日ニ備フベシト論ジテ居ル此ノ如キ論争ハ十九世紀ノ初カラ中頃ニカケテ英國政界ノ大問題トナリ又同世紀ノ終ニ於テ獨國ノ大問題トナツタ。而シテ此兩國ノ解決法ハ反對ニナツタノデアル即チ英國ハ Corn Laws ノ撤廢ニ依テ大膽ナル自由貿易策ヲ取り獨國ハ大ニ穀物稅、家畜稅ヲ起シテ保護策ヲ實行シタ。夫故ニ今度ノ戰爭ハ恰カモ兩國ニ向テ此經濟政策上ノ一大試驗ヲ行タトイフコトニナル。此點ニ就テ昨年夏以來兩國ニ起タ所ノ事實ヲ比較研究スルノガ本論ノ趣意デアル。

英國ニ於ケル穀價騰貴

アダム、スミスノ國富論ニ依レバ當時英國ノ小麥輸入高ハ全消費高ノ五百九十分一ニシカ當ラナカツタガ夫カラ百三十年後ノ今日ハ全消費高ノ四分三ヲ外國又ハ殖民地カラ輸入シ殘リノ四分一ノミヲ自國デ產出スルノデアル故ニ若シ海上ノ戰爭ニ於テ英國ガ敗レルカサウデナクトモ敵國ノ軍艦ガ多數ニ外洋ニ出テ居テ英國ノ航路ヲ危險ニスルナラバ英國人ハ忽チ兵糧攻メヲ受ケルヨリ外ニ致方ハナイ。此ノ如キ海戰ノ失敗ノ爲メニ全海岸線ガ封鎖サレテ英國ガ開戰後數週

間内ニ降參シタトイフ話ハ小説ニモ出來テ居ル。

夫ダカラ昨年七月ノ末週ニ塙塞間宣戰ノ報ガ青天ノ遠雷ノ如クニ響キ亘リ次
デ歐洲五強國ノ關係ガ疾風迅雷ノ勢ヲ以テ破壞サレタ彼ノ當時ニアリテ英國ノ
公衆ガ其臺所ノ貯ヘニ就テ恐ヲ抱キ、食料品市場ノ恐慌ヲ惹起シタノハ怪シムニ
足リナイ。ソコデ政府ハ直チニ全國ノ小麥在高ト當年ノ作柄ヲ調査シテ四箇月間
ニ消費スベキ麵麩ノ原料ハ充分デアルトイフコト、且又英國ノ海軍ハ英米間ノ航
路ヲ確實ニ支配シテ居ルカラ米國ノ小麥ハ續々入荷スベキコトヲ公表シタ。又世
間ノ識者ハ此際公衆ガ疑心暗鬼ヲ生ジテ殊更食料品ノ買込ヲ爲ストキハ徒ラニ
其市價ヲ競リ上ゲテ貧民ヲ苦シムルニ過ギナイコトヲ新聞演說等ニ依テ切言シ
タ。夫デ食料品市場ノ恐慌モ二週間ヲ經ズシテ大體鎮靜ニ歸シタノデアアル。八月七
日ニハ政府當局ト全國食料品問屋組合ノ代表者トノ協議ニ依テ砂糖「バター」チー
ス「ペーコン」等(此内ニハ小麥ヲ含マス)ノ最高價格ヲ發表シタガ是モ十五日以後ニ
ハ無用ニナツタ。

此ノ如クシテ疑心暗鬼ヲ生ズル底ノ「パニツク」ハ鎮メルコトガ出來タケレドモ、

事實上ニ於ケル食料供給ノ困難ヲ救フ爲メニハ更ニ實質的ノ方策ヲ講ジナケレバナラヌ。其方策ノ第一ハイフマデモナク海軍ノ活動デアル。第二ハ外國爲替ノ救済デアル。第三ハ海上保險ノ官營デアル。是等ノ策ハ單ニ食料問題ノ爲メノミデナク一般ノ外國貿易保護又ハ金融界ノ救済又ハ戰爭其者ノ一部トシテ行ハレタニハ相違ナイケレドモ殊ニ食料供給トイフ立場カラ特別ノ注意ヲ以テ爲サレタコトハ疑ナイノデアル。例ヘバ戰時保險官營ノ如キハジョン・スチユアート・ミルノ時カラ自由貿易ニ依ル食料供給ノ補助策トシテ、即チ農業保護稅策ノ對案トシテ主張サレタモノデアル。蓋シ一國ノ經濟ヲ世界經濟トイフ大キナ組織ノ内ニ編ミ込ンデ自產自給ノ本城ヲ捨テ、掛ルカラニハ其世界經濟ノ通路ヲ確實ニスベキ海軍、保險、爲替ヲ完全ナラシムルヨリ外ニ戰時ノ政策ハ立タナイ道理デアル。

サテ是等ノ政策ハ實際ニ如何ナル效果ヲ收メ得タカトイフニ海軍ハ獨逸ノ本艦隊ヲキール軍港ノ奥ヘ押込メテ所謂 *silent victory* ヲ誇ルノミナラズ遠洋ニ出テ居タ獨逸ノ軍艦ヲモ着々征伐シテ確實ニ世界ノ制海權ヲ有スル事ト成ツタ。保險モ開戰前後數日間ニ行ハレタ[バニツク、レート]ヲ引下ゲテ五分ノ *flat rate* ニシタ間

モナク三分ヲ唱へ、次デ九月初ニ二分ヲ唱フルニ至ツタ。爲替モ都合ヨク動テ來タ。從テ倫敦ノ相場が高クナレバ、ナル程米國カラ小麥ノ荷着ガ多クナツテ來ルコトニナリ、相場ハ九月、十月、十一月ト徐々ニ騰貴シタケレドモ其割合ハ極メテ輕イモノデアツタ。若シ此戰爭ガ二三箇月前ニ破裂シタナラバ騰貴ハ甚ダシクナツタカモ知レナイガ八月ハ正ニ小麥ノ收穫期デアルカラ内外共ニ荷物ガ極メテ多カッタノデアアル。

昨年七月乃至十一月ニ於ケル倫敦ノ英國產小麥相場ハ左ノ通りデアル。

七月四日	三十四志四片	九月五日	三十六志二片
八月一日	三十四志二片	十月三日	三十七志一片
八月十五日	四十志三片	十一月七日	三十八志八片

併シ此平穩ナル形勢ハ長續キスルコトガ出來ナカツタ其後ノ相場ハ次ノ如ク動イタ。

十二月五日	四十二志一片	二月二十日	五十六志
一月二日	四十四志四片	三月六日	五十五志十一片
二月六日	五十三志三片	四月三日	五十四志六片

三月ノ相場ヲ以テ昨年七月ニ比スレバ二十志以上ノ差ガアル。即チ約一倍半ニ

上ツタノデアル。歐米ニ於ケル小麥ノ作付反別ハ最近五十年間非常ニ増加シテ來メノデ英國產ノ小麥相場モ一八八四年以來二十五志乃至三十五志ノ間ヲ往來シテ居タ。五十志以上ノ相場ハ一八六七年ノ六十四志五片又ハ一八五五年クライミア戰爭當時ノ七十四志八片ニ遡ラナケレバ見ルコトガ出來ナイノデアル。日本ノ米ガ明治四十五年ノ貳拾參四圓カラ大正三年ノ拾貳參圓ニ下ツタコトヲ思ヘバ英國ノ事情ハ左程驚クニ足ラナイケレドモ彼ニアツテハ是コソ捨置キ難キ暴騰ナノデアル。

是ニ於テ穀物騰貴ノ原因ハ議院ノ内外ニ於テ頻リニ研究セラレ、穀價調節ノ種種ノ方法論ヤ反對論ヤガ出テ來タ。今各方面ニ於ケル研究ノ結果ヲ綜合シテ見レバ二種ノ原因ヲ指摘スルコトガ出來ル。其一ハ船腹ノ不足其他ノ原因ニ依テ運賃ガ暴騰シタトイフコト、其二ハ小麥其物ノ不足デアル。

運賃ハ十二月末カラ二月ヘ掛ケテ非常ニ高クナツタ。二月ノ運賃ヲ開戰前ニ比スレバ一倍半乃至二倍半ニ當ル。小麥「クオート」ニ付テノ運賃米國カラリバプーランドマデ平時三志位ノモノガ今ハ八志ニ上ツテ居ル。開戰當時ニハ戰時危險ノ爲

メニ保險料ガ暴騰シ其爲メニ海運界ハ不景氣ニナルダラウト豫測シタ人モアツタガ實際ハ之ト反對ニ保險料ハ比較的安ク運賃ガ却テ暴騰シタ或人ハ之ヲ評シテ海軍ノ勝利ガ食物ノ騰貴ヲ來タシタトイフタ是ハ一種ノ冗談ニ相違ナイケレドモソコニ多少ノ論理ガアルカラ不思議デハアルマイカ。

此ノ如ク運賃ノ騰貴ガ食物騰貴ノ一原因ヲ爲シタコトハ明カデアルケレドモ是ノミデ事實ノ全部ヲ説明スルコトノ出來ナイノハ數ニ於テ是亦明カナコト、イハチバナラス而シテ其他ノ原因ハ何レニアルカトイヘバ是即チ小麥其者ノ不足デアル。

英國ガ一九一三年ニ輸入シタ小麥ノ產地別ハ次ノ通りデアル。

米	國	四二、〇〇〇、〇〇〇	「ハンデルツ ドウェー」	亞爾然丁	一五、〇〇〇、〇〇〇	「ハンデルツ ドウェー」
露	國	五、〇〇〇、〇〇〇		印度	一八、〇〇〇、〇〇〇	
加	奈	二七、〇〇〇、〇〇〇		濠洲	一〇、〇〇〇、〇〇〇	
陀		一二二、〇〇〇、〇〇〇				
合	計					

然ルニ此内デ露國ノ小麥ハボルチツク海及黑海ノ封鎖ニ依テ外部ヘ出ルコト
 デ出來ナクナツタ。而シテ印度ハ生憎ノ平作以下、濠洲ハ全然不作デアルカラ米國

加奈陀、南米ガ唯一ノ輸出元トナツタ。加之佛國ノ北部ガ戰爭ノ爲メニ荒サレタ結果トシテ小麥ノ減作ヲ來シテ居ル。之ガ爲メニ倫敦市場ハ英國ト佛國ト兩方ノ需要ニ應ジナケレバナラナイ。即チ需要供給ノ兩方面ニ騰貴ノ原因ガアルノデアル。ソコデ此騰貴ヲ救フベキ政策ハ如何。

第一ハダーダチルス海峽ヲ開テ南露ノ停滯セル小麥ヲ運ビ出スコトデアル。此策ガ成效スレバ小麥ヲ出スト共ニ露國ノ缺乏セル軍需品ヲ輸入スル道モ開ケルノデアルカラ絶好ノコトナリトシテ三月中ニ英佛聯合艦隊ノ派遣ガ行ハレタノデアルガ終ニ不成效ニ終ツタ。英國ノ海軍大臣ハ是ガ爲メニ辭職スルニ至ツタ。

次ハ小麥ノ最高價格ヲ定メルコトデアル。併シ英國デ最高價格ヲ定メテ相場ヲ抑ヘルトキハ米國カラノ輸出ヲ制限スルコトニナルベキ恐ガアル。米國人ヲ強制シテ其持荷ヲ安ク賣ラセルトイフコトハ出來ナイ。然ラバ政府ガ昨年砂糖ヲ買占メタ様ニ小麥ヲ買占メルカトイフニ是亦徒ラニ相場ヲ競リ上ゲルコトニナルデアラウ。或人ハ開戰ノ初ニ當ツテ政府ガ高イ砂糖ヲ買フ代リニ當時安カツタ所ノ小麥ヲ買込ムベキデアツタト論ジタケレドモ既往ハ遂フコトガ出來ナイ。

更ニ一部の解決法トシテ運賃ノ最高限ヲ定ムベシトイフ案ガアル。是ガ議會ヘ提出サレタ。併シ小麥ノ最高運賃ヲ定メレバ船主ハ小麥ヲ外國船ニ運バセテ自ラ他ノ荷物ヲ選ブデアラウ。更ニ進ンデ政府ガ鐵道ヲ徵發シタ様ニ汽船ヲモ徵發シテ海運官營ヲ實行シタラバ如何トイフニカクシテモ尙ホ船腹ノ不足ヲ補フコトハ出來ナイ。船腹ノ不足ハ世界的ノ事實デアル。

開戰ト同時ニ獨逸兩國ノ商船ハ世界各地ノ港ニ繫留サレルコト、成ツタガ其噸數ハ世界ノ噸數ノ一割四分卽チ五百萬噸ニ達シテ居ル。其上ニ世界ノ噸數ノ半分ヲ領スル英國ノ船ノ五分一ガ政府ノ御用船トシテ借上ゲラレタ。此二口ヲ合計スレバ世界ノ噸數ノ二割四分ガ働カナイコトニナル。而シテ荷物ノ東洋又ハ米國カラ歐洲ヘ行クモノハ多イガ歐洲カラノ〔復リ荷〕トシテ積ムモノガ乏シイ。加之軍事輸送ノ爲メニ港ガ混雜シテ船ノ荷役ニ時日ヲ要スルコト平時ニ倍シテ居ル。是故ニ船腹ヲ増サス以上ハ假令官營ヲ行テモ食物ノ供給ヲ裕カニスルコトハ出來ナイ。

此ノ如キ理由デ救濟策ハ中止ニ決セラレタ。併シ幸ニシテ二月十八日カラ實行

サレタ所ノ獨逸ノ「潜航艇封鎖」モ殆ンド妨害ヲナサズ、保險料モ之ガ爲メ騰貴スル様ノコトハナカツタ。其内ニ米國ノ荷物モ倫敦ノ高値ニ釣ラレテ續々出テ來タカラ相場ハ三月ヲ頂點トシテ其後下落ニ向テ居ル。

獨國ノ穀價調節

獨逸ノ軍隊ガ陸上ニ於テ世界無比ノ強大ナモノデアアルコトハ明カニセラレタケレドモ海軍ノ方面ニ於テハ殆ンド無力トイハテバナラヌ。中立國ヲ通ジテ多少ノ外國貿易ハ爲シ得ルトシテモ平時ノ貿易高ノ七割ガ海上ノ貿易デアアルコトヲ思ヘバ其打撃ノ大ナルハ推測ニ難クナイノデアアル。獨逸ハ開戰後外國貿易統計ヲ發表シナイカラ精シキコトハ分ラヌケレドモ恐ラク平生ノ三割以下ニ下ツテ居ルト考フベキ理由ガアル。特ニ本年三月一日カラ英國ハ潜航艇封鎖ニ對スル報復手段トシテ中立國船舶ノ獨逸ニ出入スルモノヲ嚴重ニ取調べルコトニナツタカラ一層甚ダシキ制限ヲ蒙テ居ルデアラウ併シナガラ獨逸ハ此外國貿易ノ杜絶ニモ拘ラズ、少シモ軍需品ノ缺乏ヲ告ゲテ居ラナイ。却テ此點ニ於テ聯合軍ヲ凌駕シテ居ル。食料品ニ就テモ非常ノ不便ハ受ケテ居ルガ國民ヲ餓死セシムルニ至ラナ

イ。其理由如何。

獨國ハ英國ニ劣ラヌ工業國デアルケレドモ三十餘年前カラ關稅政策其他ノ方法ニ依テ農業ヲ保護シテ居ルカラ食物ノ供給ニ就テハ英國ノ如クニ外國ニ依頼スル必要ガナイ。獨逸ノ穀物關稅ニ付テハ本誌ニ河田嗣郎氏ノ論文ガ出テ居ルカラ此ニ述ブルコトヲ爲ナイガ此關稅ノ爲メニ獨逸ノ穀物作付反別ガ維持セラレ、増加セラレツ、アツタコトハ英國ノ耕地ノ減少シツ、アツタノニ對照シテ最モ注意ヲ要スル事柄デアル。(Statesman's Year-Book, 1915, P. IX. 參照)

本年二月獨逸デ出版サレタ Die deutsche Volksernährung und englische Aushungerungsplan ト題スル書物ハ有力ナ農學者、經濟學者、統計家、醫師等ノ合著デアツテ頗ル信用スベキモノトセラレテ居ル。余ハ其書ヲ手ニ入レルコトガ出來ナイケレドモ書物ノ内容ノ梗概ヲ英國ノ「エコノミスト」ニ依テ知ルコトガ出來タ。

同書ニ依レバ獨逸ノ農業ハ獨逸人ノ消費スル小麥ノ三分二ヲ生産スルノミニシテ其餘ノ三分之一ハ外國カラ輸入シテ居ル。併シ獨逸人ノ多數ハ小麥ノ麵麩ヲ用ヒズシテ「ライ」麥ノ麵麩ヲ食シテ居ル。「ライ」麥ノ食用消費高ハ小麥ノ一倍半デアル。

而カモ「ライ」麥ノ產額ハ非常ニ多イカラ食用ノ外ニ釀酒用又ハ動物ノ飼料トシテ多量ニ消費セラレテ居ル。又獨逸ハ世界中デ最モ多クノ馬鈴薯ヲ作ル。而シテ其大部分ハ平生動物ノ飼料酒精ノ原料ト爲シ外國ヘモ輸出シテ居ル。又牧畜モ非常ニ發達シテ居ルノデ牛豚肉、牛乳、鶏卵等ハ自國產ヲ以テ消費ノ最大部分ヲ支ヘテ居ル。唯家畜ノ飼料トシテ大麥ヲ多量ニ露國カラ輸入シテ居ルカラ是ノミハ戰時ニ於テ大ニ缺乏ヲ感ジルノデアル。

之ヲ數字デ示セバ次ノ如クニナル。

小	麥	生産高		食用		其他用		燕	麥	生産高		食用		其他用	
		千石	噸	千石	噸	千石	噸			千石	噸	千石	噸	千石	噸
「ライ」	麥	二、九〇〇	八、九三	二、七〇〇	四、九〇	二、七〇〇	四、九〇	馬鈴薯	五、二一五	一、三六三	三、六三三	四、〇〇〇	七、七〇〇	五、七〇〇	一、六三三

此事實ニ依テ見レバ若シ獨逸人が肉類ノ使用ヲ少クシテ動物ニ與フベキモノト工業用ニ供スベキモノヲ以テ麵麩ヲ作ルコトニスレバ自國產ノミヲ以テ支ヘルコトガ出來ル。即チ最近二三十年間ニ向上シタ獨逸人ノ生活程度ヲ昔ニ戻スト思ヘバ差支ナイノデアル。併シ之ガ爲ニハ國民的ノ組織ヲ立テナケレバナラス。之ニ對シテ獨逸政府ノ取ツタ方策ハ如何。

開戦ト共ニ平素穀物ヲ他カラ輸入シテ居ル所ノ地方ニハ食料品市場ノ恐慌ヲ惹起シタウエストフアリアデハ直チニ穀物ノ最高價格ヲ定メタ。併シ他ノ地方デハ人心ノ鎮靜モ早カツタノデ此ノ如キ手段ハ取ラナカツタ。政府ハ八月四日ノ議會デ食物ノ關稅ヲ撤廢シ、且必要ノ場合ニハ最高價格ヲ定ムルノ法律ヲ通過サセテアツタケレドモ實際ニハ之ヲ行ハナカツタ。

然ルニ八月カラ九月十月ヲ通ジテ「ライ」麥及小麥ノ相場ハ著シク上ツテ來タ。一噸ニ付テノ相場ハ左ノ通りデアル。

「ラ イ」 麥	開戦前		開戦後	
	九月十五日	十月十五日	九月十五日	十月十五日
大	一七〇—一八〇	二一四	一八六	二二六
小	一九〇—二〇〇	二四〇	二二〇	二五四

此他肉類ノ市價ハ倍額ニ上リ、「バタ」「チーズ」等モ暴騰シ魚ハ全然其影ヲ絶チ鹽魚サヘモ少クナツタ。此頃木綿羊毛、麻等ノ原料不足ノ爲メニ工場ガ操業中止ヲ行ヒ勞働者ノ業ヲ失フモノガ非常ニ多カツタカラ「プロシア」政府ハ數億ノ公債ヲ起シテ道路ノ改築ヲ行ヒテ僅カニ救済ノ途ヲ付ケタノデアル。

十月末ニ至ツテ政府ハ遂ニ最高價格ヲ定ムルニ至ツタ。其價格ハ東部ノ產地ニ

ハ安ク西部ニハ高ク定メラレタ。伯林ノ價格ハ一噸ニ付二百七十「マーク」デアル。之ヲ英國風ニ換算シテ見レバ「クオーター」ニ付五十六志六片トナル。英國ノ相場ハ當時三十六志六片デアツテ、本年三月ノ最高點ガ五十六志デアル。

獨逸政府ハ此最高價格ノ公定ト共ニ穀物節約ノ命令ヲ發シタ。曰ク「ライ」麥ヲ家畜ノ食料ニ充ツベカラズ、小麥粉ヲ製スルモノハ必ズ一割ノ「ライ」麥粉ヲ加フベシ。「ライ」麥ノ麵麩ヲ作ルモノハ必ズ二割ノ馬鈴薯粉ヲ加フベシ(此率ハ後ニ三割ニ改メラレタ)犯スモノハ罰金及禁錮ノ刑ニ處セラルベシ。

カクノ如クニシテ政府ハ一方穀物ノ使用ヲ節約セシメテ他方其市價ノ騰貴ヲ抑ヘント試ミタノデアアルガ實際ノ效果ハ思ハシクナカツタ。何トナレバ政府ノ定メタ最高價格ハ十二月末マデ其マ、ニ繼續シ一月以後ハ毎月一日ト十五日ニ一「マーク」平ヅ、引上ゲルコトニ成ツテ居タカラ穀物商ハ或ルベク其賣出シヲ先ヘ延シテ高ク賣ラウトスル。最高價格ノ法ハ其標準以下デ穀物ヲ賣ツタモノニ嚴罰ヲ加ヘルコトハ出來テモ賣惜デ居ルモノヲ強制シテ賣ラセルコトガ出來ナイ。即チ供給ヲ増スコトガ出來ナイ。從テ市場ニ穀物が不足スルカラ法網ヲ犯シテ高ク

賣買スルコトモ行ハレザルヲ得ナイ。荷造費用買手持チトカ手數料トカ色々ノ名義ヲ用ヒテ事實代金ヲ高クスル様ニナル。加之牛馬ニ「ライ」麥ヲ與フベカラズトカ麥粉ニ「ライ」麥ヲ混ズベシトカイフコトハ如何ニ警察ノ取締ヲ嚴ニシテモ實際ニ出來ナイ規則デアル。

是ニ於イテ政府ハ更ニ根本的ノ政策ヲ立テナケレバナラヌ。是ガ穀物專賣法デアル。

本年一月中政府ハ戰時穀物會社 Kriegsernährungsgesellschaft トイフモノヲ設立シタ。其資本ハプロシア政府、全國ノ各大都市及實業家ガ出スコト、シ此三團體ノ代表者ヲ取締役トナシ、配當ハ五分以内ニ制限シ、是以上ノ利益アラバ國庫ノ收入トナスコトニ定メタ。而シテ二月一日カラ政府ハ此會社ヲシテ穀物專賣ヲ爲サシムベキコトヲ宣言シタ。獨逸國內ニアル穀物ハ精細ニ取調ベラレ、農家ガ自家ノ食用ニ供スルモノ、外ハ悉ク買上グラレタ。他ノ一方ニハ帝國內ノ各家族ノ人口ヲ取調ベテ置テ一人ニ付一週間二「キログラム」即チ四斤以上ノ麴麵ヲ用ヒサセヌコトニシタ。而シテ此規定ヲ實行スル爲メニ麴麵切符ヲ作ツテ一人ニ付一週一枚ノ割デ各

戸ニ分配シタ。麥粉商人又ハ麵麴屋ハ皆此專賣會社ノ代理人トナツテ居ルカラ彼等ハ此切符ト引換デナケレバ品物ヲ渡サナイ。代金ハ無論政府ノ定メタ値段ニ限ラレテ居ル。ソコデ麵麴屋ハ一週間ノ終ニ客カラ受取ツタ切符ヲ取揃ヘテ中央本部ヘ出シテ之ト引換ニ前ト同額ノ麥粉ヲ交付セラレルノデアアル。消費者ノ方ハ每週新シイ切符ヲ本部カラ配布セラレル。古イノハ無効ニナルカラ政府ヘ返サナケレバナラス。子供ヤ老人ハ食物ノ分量ガ少クテ足リルカラ其餘リヲ切符ノマ、返スコトニナルノデアアル。

又政府ハ小麦[ライ]麥ノミナラズ馬鈴薯、燕麥ノ在荷高ヲ調べ、牛馬豚ノ頭數ヲ調べタ。必要ノ場合ニハ豚ヲ一時ニ殺シテ其肉ヲ鹽漬ニシテ保存シ、カクテ其飼料ヲ節約セントノ計劃モ立テラレタ。動物ノ飼料ニ就テハアラユル殘滓ヲ利用スルノ計ヲ設ケ、大都會ニ於ケル塵芥マデモ組織的ニ取扱フコト、成ツテ居ル。又盛ニ婦人會ヲ開テ食物營養法ヤ節約料理法ノ講演ヲヤルトイフ様ナコトモ行ハレタ。其一例トシテ馬鈴薯ヲ「ナマ」ノマ、皮ヲ剝ケバ殘滓ガ多クナルカラ煮タ後ニ皮ヲ取ルトイフコトガ餘程廣ク行ハレル様ニ成ツタトイハレテ居ル。

專賣法ハ最高價格ト異リ、充分ニ成效シタト報導サレテ居ル、實際ニ於テ本年ノ端境期タル七月ニ入テカラ政府ガ麵麩ノ公定値段ヲ引下ゲタ所ヲ見レバ此報導ハ正シイデアラウト思ハレル。

結 論

近世ノ經濟組織ヲ人體ニ譬ヘテイヘバ金融組織ハ神經系統ノ如ク、商品ノ集散ハ血液ノ循環ノ如クデアル、或事變ガ起タ時ニ第一「シヨツク」ヲ受ケルノハ株式市場、金融市場デアル。其「シヨツク」ノ激烈ナルトキハ一時商品ノ流通マデモ止メルコトガアリ得ル併シ神經系統ガ麻痺シテモ血液ノ循環セル間ハ生命ヲ失フニ至ラナイノデアル。金融問題ハ戰時ノ經濟上頗ル肝要ニハ相違ナイケレドモ食料問題ハ更ニ大切ナルモノデアル。獨逸ハ戰時金融ノ解決ヲ不換紙幣ニ求メタカラ通貨ノ膨脹ハ今日恐ラク參拾億圓以上ニ達シテ居ルダラウ。其爲メニ今ハ興奮劑ヲ飲ンデ神經ヲ引立タシメラレタ形ニ成ツテ居ルケレドモ戰後ニ至ツテ其處分ニ苦シムベキコトハ推測ニ難クナイノデアル。併シ不換紙幣ニシテモ兎ニ角戰時金融ノ應急策トシテ充分效果ヲ奏スルコトガ出來ルケレドモ食料品ニ至ツテハ不

換紙幣ヲ發行スルコトハ出來ナイ。四方ニ敵ヲ受ケナガラヨク其食料供給問題ヲ解キ得タコトハ獨逸人ノ大ナル誇デアラ子バナラス。

獨逸人ハ如何ニシテ此困難ナル問題ヲ解キ得タカ。其理由トシテ吾人ハ一方ニ其組織の才能ヲ舉ゲナケレバナラス。獨逸ニハ偉大ナル組織ヲ爲シ得ル所ノ官僚ガアリ、又其官僚ニ服シテ組織ニ順應シ得ル所ノ訓練サレタ人民ガアル。穀物專賣ノ如キハ非常ニ複雑ナル組織ト非常ニ嚴格ナル規律トヲ以テスルニ非ザレバ到底行フ能ハザル方法デアル。佛國デモ本年五月中穀物專賣ノ計劃ヲ立テタケレドモ此策ガ果シテ都合好ク行ハレタカ否カ頗ル疑問トセザルヲ得ナイ。獨逸ノ官僚政治、軍隊の訓練ニハ好マシカラザル缺點モアルケレドモ其組織ノ卓越セルト其能率ノ大ナルトニ至ツテハ吾人ノ賞讃ヲ禁ズル能ハザルモノデアル。獨逸ハ戰爭ニ於テ比較的少ナイ兵ヲ組織ニ依テ、エフイシエントニ勸カセタ如ク不足勝チナル穀物ヲ組織ニ依テ不足ナラザラシメタトイフコトガ出來ル。

併シナガラ獨逸ガ穀物自給ニ成效シタ理由ハ開戰後ノ施設ノミデ説明スルコトハ出來ナイ。開戰以前ニ於テ此策ヲ行フノ基礎ヲ作ツテアツタノデアアル。其基礎

トハ何カ。イフマデモナク關稅政策デアル。一八七九年ノビスマルクノ關稅法及一九〇二年ノビュローノ關稅法ハ何レモ農業ノ爲メニ充分ナル保護稅ヲ規定シテアル。其趣意ハ帝國財政ノ收入ヲ増サントスル御都合主義モアラウ。又獨逸ノ貴族主義ノ柱石タル「エンケル」ノ勢力ニ押サレタ所モアラウ。併シ是等ノ動機ト共ニ軍國主義即チKriegsbereitschaftトイフ思想ヲ數ヘナケレバナラス。戰時ニ於ケル食料ノ供給トイフ問題ハ英國ニ於テモ昔カラ論ジラレテ居ル。穀物法撤廢運動ノ時ニモ地主黨ハ此論據ニ立ツテ反對シタノデアル。而シテジョン・スチューアート・ミルハ次ノ理由デ自由貿易ヲ辯護シテ居ル。曰ク戰爭ハ避クベカラズト雖モ一國ガ世界中ノ總テノ國ト戰爭ヲスルコトハ事實ニ於テアリ得ナイ。甲國トノ戰爭ニ依テ其穀物ノ輸入絶ヘタトシテモ吾人ハ尙ホ乙丙丁等カラ輸入スルコトガ出來ルデアラウト。然ルニ今回ノ獨逸ノ狀態ヲ見レバ世界中殆ンド總テノ國ト戰爭ヲシタモ同然デアアル。獨逸ハ穀物自給スルカ然ラズンバ降服アルノミ。曲リナリニモ穀物自給ヲ行ツテ戰爭ヲ繼續スルコトノ出來ルノハ組織訓練ト關稅法ノ賜デアル。

翻テ英國ノ狀態ヲ見レバ大膽ナル自由貿易策ハ英國ヲシテ完全ニ世界經濟ト

稱スル大キナ組織ノ一局部タラシメタ英國ハ自給ノ法ヲ行ハントシテモ行フコトハ出來ナイ。自給ガ行ハレナイトスレバ之ニ代ルベキ對策ハ何カ。イフマデモナク世界經濟ヲ保ツコトデアル。貿易ノ通路ヲ保護スルコトデアル。故ニ英國ハ海上保險官營ヲ行ヒ、外國爲替救濟ヲ行ツタ戰爭前ニ於テハ海軍ノ充實ヲ極力遂行シタ。獨逸人ハ穀物及家畜ニ保護稅ヲ課シテ平素高價ナ食料ヲ買フテ居ル。此高價ナル代金ハ獨逸人ガ此交通至便ナ世界ニ於テ殊更自給的國民經濟ヲ維持セント勉ムルガ爲メニ支拂フ所ノ罰金デアル。ソコデ英國人ハ平素高價ナ穀物ヲ買ハナイ代リニ高價ナ海軍費ヲ支拂テ居ル。此海軍費ハ英國ガ此列強對峙ノ世ノ中ニ世界的分業ノ利益ヲ收メントスル爲メニ支拂フ所ノ罰金デアル。即チ問題ハ保護稅カ海軍カ其一ヲ選ベトイフコトニナル。

全體ノ結果カラ見テ英獨何レカ食料供給ニ困難シタカトイヘバ無論獨逸デア。併シ組織トシテ見レバ英國コソ却テ獨逸ヨリモ不確實ナ狀態ニ居ル。本年二三月頃英國ノ穀物相場ノ暴騰スルヤ英國ニモ最高價格ヤ穀物官營ヤヲ唱ヘタ向ガアルノデア。ケレドモ是等ノ策ハ英國デ行ハレナイ何故行ハレナイカトイヘバ

英國人ノ消費スベキ穀物ハ英國人ノ手ニアラズシテ外國人ノ手ニアル故ニ英國政府ハ其穀物ノ積出元ヲ押ヘル力ガナイ唯相場ノ高キニ依テ積出ヲ誘フバカリデアル。之ニ反シテ獨逸ハ不充分ナガラモ自國用ノ穀物ヲ自國人ノ手ニ有テ居ルカラ政府ノ力デ之ヲ精査スルモ徵發スルモ自由デアル。獨逸ハ英佛伊露ノ外ニ米國ヲ敵トシテモ戰爭ヲ繼續スルコトガ出來ルケレドモ英國ニ取テハ米國ヲ敵ニ廻スコトハ絶對ニ出來ナイ。唯米國ガ其最大ノ得意先タル英國トノ戰爭ヲ敢テシナイノデアル。

戰爭ト經濟トハ矛盾デアル。經濟ハ國境ヲ超エテ發展セントスル。發展シツ、アル國民經濟ノ上ニ更ニ世界經濟ヲ築キツ、アル。然ルニ戰爭ハ此大キナ組織ヲ破壊スルモノデアル。戰爭團體タル國家ト世界經濟ノ一部タル國民經濟トヲ完全ニ調和サセルコトハ論理上出來ナイコトデアル。現今世界ノ列強ノ政策ハ此一致スベカラザルニ平行線ノ間ニ左右ニ彷徨シツ、アルノミ。最後ノ解決ハ列強ガ國民的偏頗心ヲ抑ヘテ平和ノ合衆國ヲ打立ツルカ、然ラズンバ一國ノ勢力ガ他ノ諸國ヲ壓シテ世界の帝國ヲ作ルカ、二者其一デナケレバナラヌ。併シナガラ是等ハ何

レモ今ニ於テ空想タルヲ免レナイトスレバ世界ハ今後幾十百年依然トシテ此矛盾ノ裡ニ生活シナケレバナラスカ夫トモ歩一步ナリトモ解決ノ空想ニ近ヅカントスルカ。

備考 本稿ノ材料ハ「エコノミスト」雜誌昨年八月ヨリ最近着ノ分マデヲ搜索シテ得タリ。

參考書 トシテハ Oxford Pamphlets, No. 44, 45, 34, etc. 其他 Hazell's Annual, 1915, Daily Mail Year Book, 1915, 等アリ。